



G5を使った 「アクティブ・ラーニング」の 実践例

高瀬 博



教員が生徒に対し一方的に知識を教授する従来の「講義形式」の授業だけでは「自ら学び、自ら問題を解決できる能力を持った人材は育たない」という考え方に基づいた「アクティブ・ラーニング」(AL)の導入が叫ばれ、全国各地でその取り組みが模索されている。

「講義中心の授業」ではなく「体験型学習」や「(生徒と共に学ぶ)共同学習」を多く取り入れることで、学問本来の「おもしろさ」に気づかせ、高校を卒業した後も自主的に学問を続けることができる力を身に付けさせることができる、理想的なALの一例を以下に紹介したいと思います。

【問題1】 () に色の名前を入れなさい。

1. as () as a crow 2. as () as a berry
3. as () as a sheet 4. as () as snow
5. as () as grass 6. as () as pitch

【語群】 black / brown / green / white

この種の問題は最後の語を調べればいい。1の場合はcrowを調べると用例で「真っ黒で」と出てくる。しかし、ここで終わってはいけない。G5でこの項をよく読むと、鳥の種類(raven ワタリガラス, rook ミヤマガラス, jackdaw コクマルガラス, carrion crow ハシボソガラス〔訳は筆者追加〕)やThe distance is 5 km as the crow flies, but 7 km by road. という例文とともにas the crow fliesが「直線距離で」という意味になる理由まで詳しく解説してある。

生徒が興味を示してきたら、「鳥が出てくるその他の表現」をG5の中から抜き出してみようと

声をかけて下記のような穴埋め問題をさせ、さらに関心を持たせるのも効果的だ。

7. as () as a bird 8. as () as a dodo
9. as () as a peacock
10. as () as a parrot 11. as () as a coot

【語群】 bald / dead / free / proud / sick

「as ... as 構文」になじんできたので、次のような発展問題を解いてもらうことにした。【語群】にある語を1語1語調べることで「なるほど」と納得するとともに、「学ぶことの喜び」を体験させることができるはずだ。

実際、この問題をさせたところ、生徒達から「試験のカンニングはcheatingと言うんだ」とか、「ノウサギの発情期は3月なんだ」という声が聞こえてきた。

【発展編】 () に動物の名を入れなさい。

12. as strong as a ()
13. as poor as a church ()
14. as cunning as a ()
15. as mad as a March ()
16. as stubborn as a ()

【語群】 fox / hare / horse / mouse / mule

「色」「鳥」「動物」について取り上げたが、他にもこの種の表現はいっぱいある。G5を使う際、出てきたら書き留めておくよう指示しておいたら、数か月後、英語学習に興味を覚えた生徒が以下のような例をまとめてきた。ALの効果があったことを実感してうれしかったので、「この種の

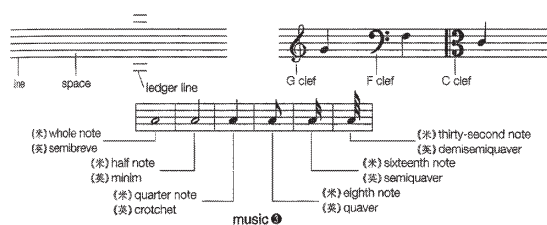
表現は記載のない辞書が多いんだよ」と伝えると、「G5でよかった」と満足げだった。

as warm as toast / as quick as a wink / as pure as the driven snow / as comfortable as an old shoe / as plain as day [a pikestaff, the nose on your face] / as flat as a pancake / as fit as a fiddle / as clean as a whistle / as fresh as a daisy

【問題2】 次の日本語を英語で表現しなさい。

1. 二分音符 2. 四分音符 3. ト音記号
4. ハ音記号 5. ヘ音記号

「講義中心」の従来の教授法だと、あらかじめ教員が問題と解答をすべて準備し、生徒はただ解答を覚えるだけという場合が多い。こういった教授法では、知識だけは増えるが、自分で解答を導き出すことのできる人材は育たない。【問題2】の場合も「共通する物は何ですか」と教員が投げかけ、生徒に「音楽」と気づかせ、「では、その語を英語で調べてごらん」と指示を出すと、生徒は“music”を調べる。しかし、それで答えが全部得られるわけではない。「生徒自らが辞書で調べて自ら答えを導き出す」という作業をすることで、①「音部記号」は上記の3つしかないこと、②アメリカ英語とイギリス英語で表現方法が違う場合もあることを学ぶことができる。



【問題3】 次の単語を英語で表現しなさい。

1. エンタイトルツーベース 2. タッチアウト
3. ランニングホームー 4. アウトコース
5. インコース 6. バックネット
7. デッドボール 8. タッチアウト
9. シーズンオフ 10. フリーバッティング

これらはすべて「野球」関係の外来語である。“baseball”を調べ、正しい英語表現を見つけさせると、「へえ、みんな和製英語だったんだ」と感動の声があがった。そこで、「日本の野球は、セリーグとパリーグがあるけど、アメリカの野球はどうなの?」と聞くと、知らないであろう質問をしたのに、ちゃんと正解が返ってきた。そこで、「ボーク (balk)」や「エンタイトル (entitle)」の意味や使い方を聞くと、自ら進んで辞書を調べて確認していた。教員がすべてを教えなくても G5さえあればかなりの疑問点を解決できることを痛感するとともに、「これからの教授法は、これだ」と実感した1日だった。

【問題】 [野球用語の日英比較] outside corner アウトコース (※out course とはいわない) / inside corner インコース (※in course とはいわない) / tag タッチアウト (※この意味で touch は用いない) / screwball シュート (※この意味で shoot は用いない) / batting practice フリーバッティング (※free batting とはいわない) / fungo ノック (※この意味で knock は用いない) / backstop バックネット (※backnet とはいわない) / off-season シーズンオフ (※season off とはいわない) / inside-the-park homer ランニングホームー (※running homer は誤り) / carom クッションボール (※cushion ball とはいわない) / overhand throw オーバースロー (※overthrow は「悪送球」の意味) / ground rule double エンタイトルツーベース (※entitle two-base とはいわない) / walk 四球 (※four balls とはいわない) / hit by a pitch デッドボール (※この意味で dead ball は用いない)。

以上にあげたように、実際に自分で英和辞典を調べることで、自ら解決する能力が身に付くだけでなく、自分がどんな事柄に興味があり、また何を深く学んでいきたいのかを見つけるきっかけになる。巻末の Picture Dictionary を使って、英語で運動させたり、さまざまな教育活動「AL」に十分活用できる「英和辞典」だと思う。

今までは「教え方がうまく、何でも解決してくれる先生が良い先生」と定義されてきたが、これからは「何でも自分で解決できる力をつけてくれる先生が良い先生」と評価されると思う。生徒にすぐに「解答」を与えるのではなく、G5を使って「自分で解決する力」を身に付けてあげる授業が求められていると思う。

(たかせ ひろし・福岡県立須恵高等学校教諭)